

保育現場に於ける造形指導の問題点 と授業に於ける学生の表現について

日名子 孝三*・長谷川 悦子**

平成20年告示の幼稚園教育要領に示されている、「第2章 ねらい及び内容」にある「表現」には、〔感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。〕(文部科学省, 2008)とある。また、平成20年告示の保育所保育指針においても、「第3章 保育内容」1-(2)・オ「表現」について全く同じ内容が記されている。子どもに対する指導内容として書かれている内容は観点を変えて読み直した時、保育現場の指導者及び養成校に在学する学生自身が身につけるべき内容として置き換えて読むこともできると考えられる。本稿では、上記の観点に立ち保育現場より寄せられた質問から見えてくる造形指導の問題点と本学福祉学科に於ける「美術表現」の授業を通して見られる学生の表現について、それぞれの問題点、改善点を探り保育現場から寄せられる質問、養成校に於ける授業内容を参考にし、保育に関わる造形表現とは何かを考える。

Key Words : 造形, 導入, 指導

I. 保育現場の造形表現に対する現状

現在の保育現場に於ける造形指導には二つのタイプが見られる。以前からの指導形態を継続して行っている幼稚園・保育園と、それぞれの上長が新しい考え方を積極的に取り入れて行こうとする二つのタイプである。継続中の園・所に於いても若い世代の指導者は自分自身の中で造形表現について模索を繰り返しているのが現状であろう。これは保育現場に於ける指導者にとって悩みの一つである。各研修会で出される質問は、全体的に同様の質問が多く、何を質問して良いかが分からないと言った様子もうかがわれ、この領域に対する戸惑いを感じる。特に難しさを感じている事柄として挙げられるのは描画表現に関することが最も

多く、反対に少ないのは立体表現であるが粘土などの立体は物としての存在が明らかであるため指導者としては安心感があるのではないかと推察する。また、造形指導の問題点は、保育現場からの声ならびに養成校に於ける造形指導の難しさが重なりあっているように考えられる。この二つの事柄は、現在に始まったことではなく以前から両者の環境に於いて長年に渡り研究、反省が繰り返されてきた経緯がある。特に両者で問題となる点は造形表現の位置づけであり、保育現場(幼稚園・保育園・所)、養成校(保育)の指導者・学生がどのように自分の中で一般美術と子どもの環境に於ける造形表現の在り方を考えていくかによって大きく変わるものと考えられる。現場の声として挙げられる造形指導の質問(問題点)は以下のように集約される。

* 人間学部児童発達学科

** 人間学部

* 以下両保育現場より提出された質問内容を原本のまま転用する。

1—(1)

【保育現場に於ける造形指導の問題点—幼稚園】

- ① 子どもが自発的に行えるための導入
- ② 想像を膨らませるような導入，言葉かけ
- ③ 指導的な保育になりがち
- ④ 周りの友達や保育者の絵をまねて描く子への対応
- ⑤ パレットに出す絵の具の数，小学校のように一人一つのパレットがないと無理なのか
- ⑥ 筆を洗う→塗る→洗う→違う色で塗るといった流れは幼児でもできるのか
- ⑦ 様々な素材の生かし方
- ⑧ 発達に合った造形活動
- ⑨ 造形に苦手意識のある子への伝え方，取り組みかた
(自分自身も何かを参考にして描くことはできるが，何もない状態で絵を描くことは苦手)
- ⑩ 楽しい気持ちから興奮しおふざけになってしまう時の反応は難しく思う
(みんなで模造紙に描いているとき周囲は嫌な思いをしてしまうこともある)

上記に挙げられた幼稚園からの質問に対するそれぞれの内容について筆者からの助言を番号順に以下に示す。

- ① その子どもが今何が一番興味を持っているか。道具の使用がどの程度可能か。
- ② その子どもが最近体験した内容を言葉で提示しイメージをわかせるようにする。
ただし，狭い範疇では出にくい。遠足ならば出かける時から帰って来た時までを遠足とする。
- ③ 方法は，子どもが理解しやすいように簡単に助言するが躰とは違う。
- ④ 描くことに自信が持てないか，好奇心が薄い。普段，室内にいるよりも外遊びの方を好むかを確かめ，特に外遊びを好むのであれば周りや保育者と同じことをしていれば大丈夫だという，自分に対する安心感から，失敗，間違い，といった気持ちを持たせないようにす

る。また，「他者と違ってても良い」という気持ちを持たせる。（保育者が描いた絵は何の為だったのか）

- ⑤ なぜ，パレットを使用するのか。パレットを使用するならば区分けが大きいパレットを使用する方が色の混濁が防げるかもしれない。現在，保育現場で使われている一人用のパレットは手先がまだ十分に動かせない子どもにとっては邪魔である。むしろ大きめのパレットを使うことを推奨する。子どもだからといって小さい道具が適しているとは限らない。
- ⑥ 道具の位置，子どもの年齢にもよる。年中・年長なら可能である。但し何の為に，その動作をする必要があるかを実際に示す必要がある。
- ⑦ 素材に保育者がこだわってはいけない。あくまでもその素材の可能性を見つける。子どもの方が見つけ出すことについては優れている面があることを忘れてはならない。これが，本来の造形活動と考える。
- ⑧ 身体的機能面から考えた活動を考える。
- ⑨ 苦手意識がどこから来ているかを探る必要がある。造形の時間は描いたり作ったりしないが地面にならばチョークで何かを表すということは出来る。絵を描くことは苦手だが線を引くことはできる。「線は表現ではないのか」という基本になる考え方を持つことによって造形活動に対する取り組み方が変わってくると考えられる。
- ⑩ グループ，集団で行う造形活動では起こりがちな事である。活動時間が一つのポイントになる。

1—(2)

【保育現場に於ける造形指導の問題点—保育園】

- ① 子どもに描く楽しさを伝えるには？
- ② 子どもの絵の発達段階（年齢），特に人や顔の発達段階について
- ③ 描画への導入の仕方，絵を描いている時の援助の仕方，展示方法について
例えば，描画が苦手な子，興味を示さない子

に対しての援助方法

(具体的にイメージを持たせて自ら描こうとすることができるようにするために)

- ④ 絵を描く際、ある程度、指定するべきか？
(例えば、顔を水色等で描く子に対しどこまで認めて、どこから指導したら良いのか)
- ⑤ 子どもの絵及び色使いと子どもの心理に関連性はあるのか

上記に挙げられた保育園からの質問に対するそれぞれの内容について筆者からの助言を番号順に以下に示す。

- ① まず、保育者が描く楽しさを知ることが条件である。子どもの描画指導に当たっては視覚重視を改めなければならない。子どもの描画にとって重要なことは体験である。また、絵を描くことも彼らにとっては体験である。そこには大人が考える上手・下手と言ったことを介在させてはならない。形、色の可能性を体験させる事によって「こんなことができるんだ」という楽しさを体の中に入れるのである。保育者は、まず落描きをすることが早道である。例えば、味覚、触覚、嗅覚などを頼りに描いてみることである。そこには、見た事もない世界が出現する筈である。
- ② 幼稚園・保育園に行くような時期は描画表現の発達過程から見ると「なぐり描きの時期」、「象徴期」、「図式期」、と言われる最も不思議な表現が表れる時期である。同じ形態をとりながら、それぞれが個性的であり、誰もがこの時期を通して来る。この時期の子ども達の表現について実際に指導はできない。何故ならば、それは表出であり表現には至っていないからである。
- ③ 「描けない・描かない・興味を示さない」といった子どもには一本の線でも良い。余白についても無理に埋めるような指導はしない。
- ④ 色彩は、指定できない。色彩は持って生まれたものであり指導すべきではない。色の名前についても子どもに間違った観念を与えないように注意する。例えば、肌色と言っ

たような名称には、特に注意が必要である。子どもには、それが人の肌の色として刷り込まれる。また、画材メーカーが付けるクレパスなどの名称には造語が多いので注意する。これらは、かなり成長してからも刷り込み状態のまま子どもの中に残る。

- ⑤ 黒の使い方などに心理的なものが感じられ、関係が無いとは言い切れない。

以上が保育現場から挙げられた造形表現の指導に関する疑問点とそれに対する助言である。幼稚園・保育園合わせて15項目に集約される。幼稚園・保育園共に実技の方法から子ども達への言葉かけ、発達段階に即した内容等となる。質問項目別に考えてみた場合重なりと考えられる項目を2グループ(A導入、B造形活動+指導)に分け、それぞれについて考察を行ってみた。

2-1(1)

【A導入について】

- | | |
|-----|--------------------------------------------------------------------|
| 幼稚園 | 「① 子どもが自発的に行えるための導入」 |
| | 「② 想像を膨らませるような導入、言葉かけ」 |
| | 「⑧ 発達に合った造形活動」 |
| | 「⑨ 造形に苦手意識のある子への伝え方、取り組み方。(自分も何かを参考にして描くことはできるが、何もない状態で絵を描くことは苦手)」 |
| 保育園 | 「② 子どもの絵の発達段階(年齢)、特に人や顔の描画表現の発達段階について」 |

以上5項目が「A導入について」で挙げられる。

【考察】

自発的、想像、苦手意識といった言葉は描画表現について語られる時よく使われる言葉である。子どもの成長過程で最初に行う造形活動は描画である確率が高く、また面倒な道具がいらないこと、子どもの発達の初段階(運動機能の腕、肘)にも重なっていることから筆記用具、紙の組み合わせによって成長過程の早い時期に家庭などでも遊びの一部として自然に入ってくると考えられる。本

学の立体造形の授業で学生からは、苦手意識を感じさせるような言葉は、ほとんど聞かれない。立体表現と平面表現との違いは、立体が物として触覚を通しての存在感があるからである。子どもが平面に描いた絵、特に子どもの絵の発達段階については保育現場の指導者、養成校の学生が最も興味を持ち、その内容の実際について難しさを感じるテーマの一つであると考え。表出から始まり表現に至る表現過程は不思議さに溢れている。すべての成人が通って来たであろう、この領域は子どもたちの経験的・体験的表現力がつぶさに見られると共にこの発達段階を理論的に集約したV・ローウェンフェルド（1903～1961）の研究成果は造形指導の入り口になると考える。以下にローウェンフェルドの集約した子どもの各年齢に於ける描画の時期、名称、特徴を記す。

- (1) なぐりがきの時期（1歳半～2歳半ごろ）錯画期・スクリブル（渦巻き状の線）
 - (2) 象徴期（2歳半～4歳ごろ）命名期→図式前期・頭足人
 - (3) 図式期（5歳～8歳ごろ）基底線・レントゲン描法
 - (4) 写実の黎明期（8歳～11歳ごろ）図式的表現傾向から写実的表現傾向へ向かう
 - (5) 写実期（11歳～14歳ごろ）観察力が増し、客観的であるがままの表現へ
 - (6) 完成期（14歳～18歳ごろ）客観的描写力が高まり、技術的にも精巧とされる
- （V・ローウェンフェルド・1996）（谷川・小澤・渡邊 2001）

上記した年齢で保育現場にあたる年齢は、(1)、(2)、(3)に該当するところである。ここで気をつけなければならない事は、この流れは平均的な子どもの描画に対する流れを示すものであり、現実的には個人差があるという事である。対象となる子どもの生活環境などにより色彩など感覚面は対象になり難い面とも言える。また、象徴期あたりから平均的に女兒は男児より手、腕など機能面の発達の早さから道具（クレパス、鉛筆など）の使いこなしも早く、細かい描写も可能になる。(1)、(2)、(3)の同時期に於いて男児は、まだ女兒よりも幼い事が表現上から窺える。子ど

もの身体的成長と共に遊びが主要な生活の一部となってくる年中、年長では土粘土などの立体表現に適した材料が使用できるようになるが、この優れた材料を使用している保育現場はそれほど多くはないと考えられる。土粘土は、触覚に訴えてくる遊びに直結した材料であるが保育現場が導入を考えた時、保管管理の難しさがあり導入する場合、保育現場の指導者が一体となって管理を行う体制が不可欠となってくる。しかし、土粘土などの立体表現に適した材料の導入は、紙粘土等とは違い全身を使用して立体表現を行える泥遊びにも繋がり、子どもの表現範囲が広がると言える。

2- (2)

【B造形活動+指導について】

- 幼稚園 「③ 指導的な保育になりがち」
「④ 周りの友達や保育者の絵をまねて描く子への対応」
「⑤ パレットに出す絵の具の数。小学校のように一人一つの
パレットがないと無理なのか」
「⑥ 筆を洗う→塗る→洗う→塗う色で塗るといった流れは幼児でもできるのか？」
「⑦ 様々な素材の生かし方」
「⑩ 楽しい気持ちから興奮しおふぎけになってしまう時の対応は難しく思う
（みんなで模紙にかいているとき周囲は嫌な思いをしてしまうこともある）」
- 保育園 「① 子ども達に描く楽しさを伝えるには？」
「③ 描画への導入の仕方、絵を描いている時の援助の仕方、展示の方法について例えば、描画が苦手な子、興味を示さない子に対しての援助方法(具体的にイメージを持たせて自ら描こうとすることができるようになるために)」
「④ 絵を描く際、ある程度、色を指

定するべきか？例えば、顔を水色等で描く子に対し、どこまで認め、どこから指導したら良いのか」

「⑤ 子どもの絵及び色使いと子どもの心理に関連性はあるのか」

以上10項目が「B 造形活動+指導について」で挙げられる。

【考察】

以上挙げられた内容は実際の造形指導と通常の教育的指導が混在している。部分的には造形活動の指導における問題であるが、もう一方では教育上の問題でもある。子どもの造形活動は遊びに沿って行うのが最も理想的であるが遊びにもルールがあるのと同じように集団で行う造形活動の中にもルールがあるということを教えて行かなければ良い造形環境は生まれないと考える。幼稚園の項⑩にあるような大きめの紙に共同で行う場合は生活の躰として注意するべきである。挙げられた質問を総合してみると描画指導に対する質問が最も多い。描画に対する質問は以前から多数あり保育の指導者達が敏感になっていると感じる。何から初め、何処で終わらすのかと言ったことであり、それが、子どもの造形活動に於いて初段階に現れ、造形の始まりとなるからである。筆者は、保育現場で行われる造形活動は遊びと密接に関連した活動と認識している。大人の造形活動とは違い、いたずら描きで良く、画面上の統制は気にすることはないだろう。子どもが経験・体験した出来事の痕跡が表現されていることが最も望ましいと理解しても良いのである。「保育現場に於ける造形指導の問題点—幼稚園」にある「何かを参考に描くことはできるが、何もない状態で絵を描くことは苦手」とする人は多い筈である。それまでに受けた教育によるところが大きいと思われるが、原因は上手・下手の問題である。対象に即した指導を行えば当然、技術的問題が出てくる。つまり、上手い・下手の問題である。造形表現を指導者がどのように捉えているかによって子どもは造形に対し好きになったり嫌いになったりするものである。子どもの時受けた造形の時間はある

意味でそれから先の美術との出会いを避けて通るか、好きになるかを選択する一つの要因になる可能性が大きいと言える。

3—(1)

【特記事項1—略画・イラスト使用の問題点】

保育現場に於ける指導者の多くは略画・イラストと言われる手本を参考にしていることが多いように見受けられる。例えば、リングを描画表現しようとする場合黒い幅のある輪郭線によって縁取りされた「赤いりんご」を壁面装飾などに使用することが顕著である。この類いは他の面でも多く見られ、子どもはそれをほぼ毎日見ることになる。子どもは指導者の示すものに疑問を抱くことは皆無であろう。

保育現場では、四季の変わり目に各保育室でその時の季節感を環境作りの一つとして取り入れることが通常行われるが、その表現の多くが保育雑誌のイラストからの転用であり、形は略画集からのコピーであると言ってよく、ルソー（1712～1778）が示す教育方針「自然に即して」（S・マクドナルド、1990）とは真逆である。色彩に関しても同様のことが言える。問題は、指導者が「観察」することを訓練すべきである。子ども達は、遊びを通し実によく周囲の物事を見ているものである。リングが円ではなく球であるということも経験上（触覚）によって知っている、と言っても良いだろう。おそらく成人である保育者は、このことで可成りの混乱を自分の中に持つことになる。保育者が円と球の違いを認識しているならば保育室内の環境作りの表現（他の造形表現との関連から考えても）に対する在り方は大きく改善されると期待できる。略画・イラストは便利であり物事を単純な形（整理された）で子ども達に示すには有効であるが、それがその物事を示している全てではない。食べ物は触覚・嗅覚・味覚・視覚によって認識されるが略画・イラストを多用することによって感覚面が損なわれる危険性がある。また、略画の多用は描いた対象があたかも事実である、と言った勘違い（刷り込み）状態を生む。これは、本学児童発達学科の学生達にも見られる傾向である。子どもは一つの物事に対し多面的な

描画表現を行っているのである。通常、成人は視覚と記憶によって物事を判断する。略画を子どものいる環境で多用することは成人になってもそれが記憶に残っているということである。子どもは、子どもなりの特異な表現をし、その表現はピカソも注目し自分の絵画に取り入れたことから考えても素晴らしい事だと言うことを忘れてはならない。

3—(2)

【特記事項2—色彩について】

前項では略画に対する見地から改善すべき点を考えてきたが、この項では改善すべきもう一つの点として色彩について考える。美しい色を使って素晴らしい絵を描く人がいるが、その色は、どうして生まれるのだろうか。色は単独で美しく見えているわけではない。ある色の側にどのような色を持って来るかによって奇麗にも、汚くも見えたりするという特徴がある。そして、このような色同士の関係を自然に身につけている人は、どこでその事を知ったのか。それともどこかで誰かに習ったのか。例えば、小さい頃から絵を習っていたとしても絵は上手になるが色については違うのである。授業で平面の課題を与えた時にそのことは非常に明確になって表れてくる。色彩は努力によって良くなるという性質は持っていない。また、人の年齢に伴って色が美しくなると言ったこともない。つまり、生まれつき持ち得ているものと理解するのが良いと考える。このことは、子どもに絵の具を使わせるとそのことが一層はっきりとする。子どもには、技術的に言っても色を体得する時間は無かった筈だからである。では、なぜ大人・子どもに限らず色彩感覚が素晴らしい人間が生まれるのか。家系的な遺伝子によるところが大きいと思われるが、根拠がはっきりとしているわけではない。保育現場からの質問の中に「絵を描く際、ある程度、色を指定するべきか？」という質問があったが、この子どもに色を指導できるのは保育者自身が、今までどのように色彩について寄り添っていたかどうかで決まる。描画表現についての質問が多いのは、このような特徴として通常の生活では理解し難い事柄が多いからである。保育環境に於ける造形表現については様々な問題

が有り、質問を出す保育者は、かなり必死であることが感じ取れる。

（日名子項）

II. 美術表現の授業を通して見られる学生の傾向と問題点

1 保育の領域における造形表現への理解

はじめに、授業内での取り組みの根底にある考え方として重要になってくるのが、保育の領域における表現への理解である。保育の領域における表現とは、「感じたことや考えたことを自分なりに表現する事を通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性をゆたかにする」（厚生労働省2008a）事である。また、保育所保育指針解説書には「子どもは毎日の生活の中で、身の回りの環境とかかわりながら生活している。その中で、美しいもの、不思議なもの、驚くようなものに出会い、心を動かしている。」（厚生労働省2008b）とある。子どもの造形活動と、その他の表現活動には明確な境目はなく、日常生活の中で自然や人々など身近な環境とかかわる事で豊かな感性や、素材を生かした表現力を養い、創造性を豊かにするのである。したがって保育者には、素材や表現の手段の特性を生かした方法で、様々な表現を経験させる事や、子どもが自分の好きな表現の方法を見つけ出す事が出来るような援助が求められる。子どもの感性を高めるには、保育者の感性が豊かでなければならない。子ども自らが喜んで造形活動を行うように促す事が重要であり、特定の表現活動のための技能を身に付けさせるような偏った指導が行われることがないように配慮する必要がある。保育者自身が造形表現における道具や素材についての正しい知識と経験を兼ね備えて初めて適切な援助が成り立つのである。子どもの造形表現の援助をするにあたり大切なのは子どもの持っている感覚に共感し、引き出す事であるが、この際重要となるのが、表現と表出の違いへの理解である。一般に「表現」は「心に思うこと、感ずることを、色・音・言語・行為などの形によって、表しだすこと。その表した形。」（水谷・岩淵・西尾1994）とされている。一方、気分や感情、

情緒など、基本的な欲求が、体の外側に働く状態（もしくは現象）の事を「表現」ではなく「表出」と言い分ける場合がある。例えば何かうれしいことがあったとき、人間は頬を赤らめ、喜びの表情を浮かべたり、歓喜の声を上げたりする。このような直感的、情緒的、もしくは本能的、生理的な行為を私たちは日ごろの暮らしにおいて、無意識に繰り返している。これに対して「表現」は、狭義に「自覚を伴った行動、主体的・自主的な活動」であり、伝達的な機能を含んでいる。つまり、泣くと言う事を例にとっているのならば、赤ちゃんが泣くのは表出と捉え、役者が泣くのは表現と捉えると言う事である。保育者として子どもの造形表現に携わる際には、保育者自身に豊かな感性と表現力と子どもの表現と表出の違いを理解する事が求められるのである。

2 美術表現の授業について

文京学院大学人間学部福祉学科で開講している「美術表現」は保育士資格取得のための科目の一つである。目的・到達目標は以下のとおりである。

目的
 学生が保育の領域における子どもの造形活動に携わる際に、保育士として対人援助の観点に立ち場面に即した幅のある援助活動を行うために必要な基礎的知識と専門的技術を学び身につける事を目的とする。

到達目標

- 学生自身が、授業を通し実際に子どもの造形活動につながる感覚や知識を体験し、身につけたものを専門職として保育の場で生かせるようになる事。
- 保育の場における造形活動で想定される様々な場面において、子どもに対しての適切な援助を理解できるようになる事。
- 子どもの造形活動は感情の表出表現でもあることを理解出来るようになる事。

本授業の授業概要は以下の通りである。

- [01] オリエンテーション：授業内容説明
- [02] 版画表現（1）：マーブリング等の転写表現
- [03] 版画表現（2）：マーブリング等の転写表現
- [04] 版画表現（3）：マーブリング等の転写表現

- [05] 平面（1）：オリジナルキャラクター制作・色彩について
- [06] 平面（2）：オリジナルキャラクター制作
- [07] 平面（3）：オリジナルキャラクター制作
- [08] 平面・色彩（1）：絵の具について・ゆびえのぐ
- [09] 平面・色彩（2）：キャラクターの彩色
- [10] 平面・色彩（3）：キャラクターの彩色
- [11] 立体表現（1）：道具の使い方・空間表現
- [12] 立体表現（2）：様々な素材を使った空間表現
- [13] 立体表現（3）：様々な素材を使った空間表現
- [14] 立体表現（4）：様々な素材を使った空間表現
- [15] まとめ

3 授業内容及びねらい

オリエンテーション

授業内の制作を通して、学生自らが子どもの頃持っていた感覚に触れる体験と、実際の子どもの表現への援助活動の場面での配慮とタイミングについて、また道具・技法について積極的に学び取ることを目指して授業に臨むよう説明する。

版画表現：マーブリング等の転写表現

手順

1. マーブリング・スパッタリング・フロッタージュ・糸引き絵の4技法について及び使用する道具画材についてデモンストレーションを交えて説明する。
2. 各自使用する用紙を切る作業を行い制作に取り掛かる。
3. 各自1技法につき4枚以上の作品制作を行う。

ねらい

描写力の問われない糸引き、マーブリング、フロッタージュなどの偶然にできる色や形による表現方法であるモダンテクニックを学ぶ。これらの技法に触れることで、学生自身の持つ苦手意識の払しょくを図るとともに、描く事への苦手意識がある子どもや、絵をかきたがらない子どもの事例を考慮した援助活動へのヒントを掴む。また、技法ごとに適した道具画材がある事、その使用法を

身に付ける。



図1 転写表現で使用する道具

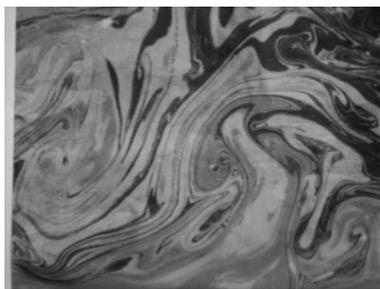


図2 マーブリング

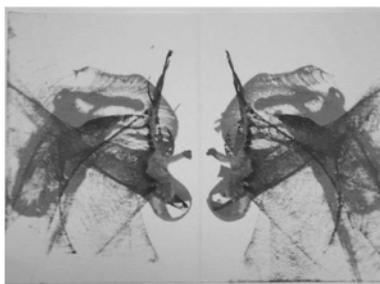


図3 糸引き絵



図4 フロッタージュ

平面：オリジナルキャラクター制作・色彩について

手順

1. オリジナルキャラクターの制作をするにあたり、まずは既存のキャラクターを例にとり色彩について（主に配色効果）形についての説明を行う。
2. 次に、各自オリジナルキャラクターの制作に取り掛かる。まずは子どもの頃に好きだったキャラクターなどを思い出しながらかき出していく。
3. いくつかの既存のキャラクターが出てきたところで、自分が挙げたキャラクターの共通点を探りオリジナルキャラクターを作る手がかりとし、自分が挙げたキャラクターの特徴を1人ずつ発表する。
4. 既存のキャラクターにはどのような特徴があるのか、をクラス全体で把握したうえで、各自どのような特徴を持ったオリジナルキャラクターを作っていくのかを決定し、キャラクターの色、形、特徴、性格、世界観などの詳細も決定する。

ねらい

配色効果について学ぶことで、造形活動の援助にあたる中で適切な声掛けや展示ができるようになる事。また制作を通して学生が自分の感覚に目を向け、一人ひとり異なった感覚や嗜好を持っていることに気づき、何かのマネや模倣ではなく自分の感覚や感情の表出が造形表現に繋がる事を理解出来るようになる事。

平面・色彩：絵の具について・ゆびえのぐ

手順

1. キャラクターの彩色に取り掛かる前に、主な絵の具の種類や特徴、絵の具の組成危険性などについての説明を行う。
2. 様々な絵の具の1例として、ゆびえのぐを取り上げ、実際に作品制作を行う。

ねらい

作品の制作を通して学生自身が実際にゆびえのぐに触れることで感覚と表現のつながりについて

気付く機会を作る。また、道具の準備の段階から学生が行うことで造形活動の援助に必要な要素や感覚を学び取る事。



図5 ゆびえのぐ

平面・色彩：キャラクターの彩色
手順

1. 油性ペンによる彩色。授業 [07] で決定した色をもとにビニールシートにキャラクターを写し取り写し絵の要領で彩色を行う。
2. 画用紙に描いたキャラクターに絵の具で彩色を行う。
3. キャラクターを描いた画用紙を色画用紙に貼り付けキャラクターの特徴や工夫点を書き添える。この時、授業 [05] の色彩についての内容をキャラクターの色と色画用紙の配色に生かすように声掛けを行い保育の現場で生かせる感覚を身に付ける。

ねらい

子どもが好む写し絵制作を学生が自ら行う事で造形活動の援助に必要な感覚を養う。また、従来の写し絵でよく使用されるトレーシングペーパーではなく、ビニール素材やアルミホイルを使うことで、素材の可能性について考える力や柔軟性を身に付ける。



図6 キャラクターの彩色に使用する道具



図7 ビニール写し絵に使用する道具

立体表現：道具の使い方・空間表現
手順

1. 立体表現、空間表現の課題については
A・・・紙粘土でのオリジナルキャラクターの立体化
B・・・授業 [02] ~ [04] で制作した作品とボンド、針金を使用した立体造形のどちらかを選択し制作する事とする。
2. 両方の手順及び使用する材料や道具についてプリント資料を使用しながら全体に説明する。
3. 各自課題を選択し、Aを選択した場合は、粘土で制作したキャラクターに可動箇所を設け仕組みの工夫をすること。Bを選択した場合は、表現するテーマの決定を行い各自制作に取り掛かる。

ねらい

選択肢として2つの課題を設けることで、素材や道具に触れる機会を増やす。様々な素材の組み合わせによって生まれる表現の可能性に触れることで、自ら工夫しイメージする力を身に付ける。

まとめ

授業全体を通して学んだ事、またそれを保育の現場でどう生かしていくかをレポート用紙にまとめて作品と共に提出。授業内容を振り返り、身についた技術や知識の再確認を図る。



図8 課題Aで使用する道具



図9 課題Bで使用する道具

4 各課題を通して見えてくる学生の問題点

版画表現：マーブリング等の転写表現

すべての課題を通して問題となってくるのが、ほとんどの学生が今までに使った事のある画材や、道具の種類が少なく経験不足であり、それぞれの特性についての知識も低いと言う事である。版画表現の課題においてよく見られるのは、使用する紙を切る作業を行う際に切れ味の鈍くなったカッターナイフの刃の対処の仕方を知らない学生が多いことである。また、知識としては知っているが、実際にカッターナイフの刃を折り取ることで切れ味を回復するという経験をしたことが無い。カッターナイフの刃を折る際に加減がわからず怪我をしてしまった学生もいる。また、定規とカッターを用いて紙を正確に（直線を）切ることが困難であること等が挙げられる。

平面：オリジナルキャラクター制作・色彩について

他の課題にも共通して言えるが、手順の説明の段階で過去の学生作品を用いた説明をすると模倣が多い傾向がみられる。

平面・色彩：絵の具について・ゆびえのぐ

授業内において様々な画材を使用するが、ねんどや、絵の具、ボンドなどを使用する際、少数ではあるが、自分の手が汚れるのを嫌う学生もあり、積極的に様々な素材に触れることで自らの感覚を通して素材の可能性を探る意識が低い事が挙げられる。

平面・色彩：キャラクターの彩色

主に平面の課題に共通して見られる傾向として、“上手く作品を仕上げなければいけない”という思考から無難に作品を仕上げる学生が多いことが挙げられる。

立体表現：道具の使い方・空間表現

課題Bでは、通常“接着”の用途に用いられるボンドの、乾燥すると透明に近くなるという特性を生かした作品作りをしているが、素材や道具に対して興味を持つものの、自ら新たな発見や実験的な試みを積極的に行う姿が少なく、無難に作品を仕上げる学生が多い。

5 まとめのレポートに見る学生の傾向

レポート内容にみられる学生が授業の中で学んだ事について多かったものとしては以下のような順番となっている。①「マーブリング等の転写表現を通して学んだ事」を挙げた学生が最も多く13名となっており、これは全体（H25年度は37名）のおよそ35%に相当する。次いで、②「素材や道具について学んだ事」を挙げた学生は、7名でおよそ19%。③「ゆびえのぐに関する事」を挙げた学生は5名で約14%となっており、④「造形活動に必要な事、前準備や造形活動の際の声掛け・援助に関する事」を挙げた学生も5名で約14%となっている。また、⑤「ボンドと針金を使用した立体表現の課題について学んだ事」を挙げた学生は4名で約11%となっている。各課題に関して学生が学んだ内容としては、

①「マーブリング等の転写表現を通して学んだ事」として以下の2つが多くみられた。

- ・ マーブリングなどの偶然にできる色や形による表現方法について学ぶことにより新しい表現の方法を身につける事
- ・ 技法についての新たな知識

この事は本来これまでに経験していいはずのモダンテクニックについて実際に経験をしている学生が少ないことを表している。

②「素材や道具について学んだ事」としては、

- ・ 授業の中でいろいろな絵の具の種類や特徴、道具の種類と使い方について
- ・ 様々な粘土や絵の具の種類があり用途や目的・年齢などにより使い分ける事
- ・ 子どもの頃感じていた絵の具の楽しさ、粘土の触感など忘れていた事を再認識した

などが多く、ここからも学生が実際に使った事のある道具や素材の少なさが感じられる。

③「ゆびえのぐに関する事」としては

- ・ ゆびえのぐを使う事で指先の感覚が養われる事や、自由に描く感覚を体験できた。
- ・ ゆびえのぐに触れた事で、絵をかく技術よりも子供の気持ちになって絵を楽しむという事を学んだ。

という要旨のものが多くみられた。絵の具の触感を伴う造形活動に初めて触れた学生が多い事、その感覚を通して造形活動を楽しいと感じ自由に表現する事を体験した事が伺える。

④「造形活動に必要な事、前準備や造形活動の際の声掛け・援助に関する事」の学んだ内容としては、

- ・ 事前に必要なものを準備することの重要性
- ・ 道具の使い方について分かりやすい説明をすることの必要性

という要旨のものが見られた。割合としては少ないが、授業全体を通して子どもに対しての適切な援助を学ぶ事が出来た学生がいると捉える事が出来る。

⑤「ボンドと針金を使用した立体表現の課題について学んだ事」としては、

- ・ ボンドを使った新しい制作方法を学んだ。
- ・ 視点を変えることで作り方が変わる事を学んだ。

という、普段使っている素材の応用的な使い方について関心を持った学生が大半であったが、これは課題のねらいとして挙げている“様々な素材の組み合わせによって生まれる表現に触れることで自ら工夫しイメージする力を身に付ける事”とい

う点において、学生が新たな表現に触れたという感覚を持った事が伺える。また、授業で学んだ事を保育の現場でどう生かしていくかについては、授業で学んだ技法をそのまま保育の場で実践したい、と言うものが大半であった。この事は、学生が授業内で新たな技法や、知識・素材に触れたという実感を持った事を示すと同時に、学生は受動的で学んだ事をさらに発展させる発想については乏しい傾向にある事も示している。しかし、具体的な実践方法は示されていないものの、学生が子どもに寄り添って造形表現の援助にあたろうとしている事が感じられる以下のような傾向も見ることが出来た。

- ・ 保育の現場で子どもに寄り添いながら楽しさを伝えていきたい。
- ・ いろいろな視点から考えてイメージを広げていくことが大切。子どもの持っているイメージを保育者の言葉で固定してしまわないようにしたい。
- ・ 上手に作れなくても楽しみながら作ることが大切だと考える。保育の現場では子どもに声かけや手伝いをして楽しく作れるようにしていきたい。

一方で、

- ・ 子どもに手本を見せる保育者は上手いものを作れるよう努力しなくてはならない。
- ・ 自分はやはり不器用だと感じた。(造形表現に対する苦手意識)

という考えも見受けられ、造形表現への理解の低さと、今までに経験した上手下手での評価による苦手意識がうかがえる。

以上の事から見えてくるのは、造形表現に関する技法や道具・素材に関する学生自身の経験の少なさと、経験が不足していると言う事への自覚の低さである。まずは自覚を持つことが保育の現場における造形表現を理解する事への一歩となると考える。この事を自覚させる方法の1つとして考えられるのが、学生には新しい表現や知識に関して関心を持つという傾向も見られる事から、まずはたくさんの経験を持たせると言う事である。今までの経験の少なさに自覚を持ったうえで、初めて保育の現場における造形表現を学ぶことに必要

性を感じ理解する事となる。その先に子どもに寄り添う援助とは何か、表現と表出の違いについての理解があるのである。

6 改善に向けて ～授業内での取り組み～

実際の授業の中で多く見受けられる傾向と問題点の要因の一つとして、生活環境の変化とそれに伴う日常生活における自分自身の感覚を介した経験の減少があるのかもしれないとの考えに立ち、美術表現の授業では学生が授業の中で感覚を取り戻すための体験を増やす事を目指して以下のような取り組みを行っている。

授業内で扱う道具についての適切な使用方法、効果的な使い方などの説明に加え、実際の使用経験を増やす為に授業内なるべく多くの道具や素材に触れるようにカリキュラムを組んでいる。例えば、造形活動の中で“切る”時に使う道具として、課題ごとにカッター、はさみ、ペンチ、ニッパーを使用する機会を設けている。立体表現の課題に取り組む際には様々な種類の“粘土”について実際に触れながら説明を行っている。また、学生は造形活動において“接着”が必要な場面で、セロファンテープを多用しがちだが、授業内においてホッチキスやボンド・ノリの特性や用途、強度についての説明を行い場面や用途に応じた接着方法があることを理解させる。また、ボンドの特性を生かした制作なども課題に取り入れている。平面・色彩の課題においての取り組みとしては、手が汚れるという概念を払しょくするために、学生が自分自身の手に直接絵の具を付けて描くゆびえのぐを使用した課題を設けている。まとめのレポートにも見られるように、この課題に取り組むことで、誰もが幼児期に持っていた感覚と表現とのつながりについて改めて気付く学生も少なくない。授業全体を通して、学生が主体的に造形表現に取り組む姿が少ない事を挙げているが、ここで重要となるのが、受動的な傾向にある学生が、自分の表現についてどう向き合うかである。課題として設定した、オリジナルキャラクターの作成は、学生が自分の感覚に目を向け、一人ひとり異なった感覚や嗜好を持っていることに気づき、何かのマネや模倣ではなく自分の感覚や感情の表出が造

形表現に繋がる事を理解出来るようになる事をねらいとしている。また、見本を示す場合にはなるべく完成作品を見せずに、仕組みや基本の構造のみを分かりやすく伝える事も必要となってくる。

美術における絵画表現は、描写力と表現力によって成り立っている。しかし、上手く描こうとする学生が多い傾向にある。一因として、今まで描写力に重きを置く指導を受けてきた事が挙げられる。美術表現、とりわけ子どもの造形表現の援助をするにあたり大切なのは子どもの持っている感覚に近づき、引き出すことである。本授業内では学生自身の持つ苦手意識の払しょくを図る事をねらいとして版画表現の課題において描写力の問われない糸引き、マーブリング、紙染めなどの偶然にできる色や形を楽しむ表現方法を学ぶ機会を設けている。子どもの表現は大人のそれとは異なったものであり、それを無条件に認める事が大切である。色や形の組み合わせを用いて表現する事が重要であり、それを楽しむ感覚は描写力よりも重要であることを体験から学びとり、子どもの表現を未熟な大人の表現としてとらえる考え方からの脱却を図る事が重要である。

（長谷川項）

Ⅲ. 結果

平成20年告示の幼稚園教育要領に示されている、「第2章 ねらい及び内容」にある「表現」には「感じたことや考えたことを自分なりに表現する事を通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。」（文部科学省・2008）とあるが、それ以前に保育現場に於ける造形指導には改善しなければならない問題点が数多く残されている。子ども達に適切な指導を行うには、指導者が自分自身をどのように教育し、研究を行う事が大切なのかを考えなければならない。養成校の授業についても同じ事が指摘出来ると考える。様々な情報が簡単に手に入る環境に身を置くことで体験に基づく経験不足の中で育った学生に対して必要とされるのは、自分の感覚を通した実体験である。授業の中で多くの体験をさせることにより、学生自身が本来児童発達の段階で必要とされる、

日常生活の中で自然や人々など身近な環境とかかわる事で、豊かな感性や素材を生かした表現力を養い、創造性を豊かにする事が重要なのではないかと考えられる。また、本来発達の段階で身に付ける豊かな感性や表現力を身につける事は、今まで描写力に重きを置く指導を受けてきた結果無意識のうちに身に付いてしまった“上手く作品を仕上げなければいけない”という思考と美術に対する苦手意識からの解放につながるのではないかと考えられる。本稿に於いては、造形活動の中で最も難しい領域である描画表現について文面を割いた。保育者からの質問に提示された「何かを参考に描くことはできるが、何もない状態で絵を描くことは苦手」と言った文言は現場の戸惑いが良く表れている。描画の問題を解決するには、自分で描くことが大切である。改まって美術的絵画を描くという事ではない。形を問わず色彩を用いて試してみることは指導者の気持を楽にさせ、子どもの造形表現に一步近づくものと確信する。ローウエンフェルドは、子どもの造形表現について「あくまでも人間形成を目的とし全体的成長の中的一面を担当するものとして美術教育を考えていること。」(V・ローウエンフェルド・1996)と述べている。この言葉を置き換えてみると造形は、特化すべきものではないが、全体的成長を補うものとして必要であり重要であると言っているのではないか。私たち指導者は改めて指導内容を再確認することを子ども達から求められている。

引用文献

- 厚生労働省, (2008), 保育所保育指針, 〈平成 20 年告示〉, フレーベル館
- 厚生労働省, (2008), 保育所保育指針解説書, フレーベル館
- V・ローウエンフェルド, (1996), 竹内 清・堀ノ内敏・武井 勝雄訳, 美術による人間形成, 黎明書房, the Macmillan Company USA
- S・マクドナルド, (1990), 中山 修一・織田 芳人, 美術教育の歴史と哲学, 玉川大学出版部, University of London Press Ltd. London, 1970
- 水谷静夫・岩淵悦太郎・西尾実, (1994), 岩波国語辞典 第5版, 岩波書店

文部科学省, (2008), 幼稚園教育要領 〈平成 20 年告示〉, フレーベル館

谷川 渥 小澤 基弘 渡邊 晃一, (2001), 絵画の教科書, 日本文教出版株式会社

参考文献

- 加藤 怜子・日名子孝三, (1996), 造形表現の指導, 学芸図書株式会社
- おかもとみわこ・大沢祐, (2010), 新・保育内容シリーズ 6 造形表現, 一芸社

(2014. 9. 23 受稿, 2014. 10. 15 受理)